

① 地域において大人と子どもが課題解決型の学びに取り組む要素	② 大人が社会教育活動に参画するために必要とされる工夫	③ 「自ら考え行動する人材」を育成するためのポイント
・興味を引くことができる企画 ・地域や日常生活に関わるテーマ設定 ・子どもの発達段階に合わせて理解しやすい内容 ・身近なことについて学ぶ ・子どもに寄り添いながらの事業 ・課題解決すべき「課題」についての存在を「情報」として知る ・社会的な課題をわかりやすく伝える ・身近な課題を知り、その課題の当事者から直接話を聞く ・参加しやすい環境・雰囲気づくり ・事業の中に一緒に考える時間があるか ・インプットだけでなく、アウトプットする機会 ・親子で考える機会 ・地域の課題を大人と子どもが共有し、「我が事」と考えられる環境 ・団体・組織をコーディネートする人 ・コーディネートできるプラットフォームは学校かまちづくり協議会が適当 ・活動の核となる人間の存在 ・「自然と情報が届く環境」「その情報を解りやすく丁寧に届ける姿勢」を根気よく構築する情報提供 ・情報は単純にコンテンツとして届けるのではなく、活動の実践者や当事者などの声や専門家の説明なども併せて届けることで、その課題を立体的に捉えてもらう工夫 ・人・モノ・コト・場所・金・情報などの資源のリスト化と常に最新情報へのアップデート ・まち協に在籍する各種団体 ・保護者やPTAとの連携 ・学校運営協議会などで問題点の共有	・大きな主題を決め、枝を広げていく企画 ・準備ではなく、当日気軽に学生が参加できるイベント ・大人自身が参加したくなる企画(大人自身が参加し、そこでコミュニティを創ることが、子どもの参画に繋がる) ・保護者としてのコミュニティから社会教育活動につながる機会 ・親世代が「やってみたかったこと」の視点でプログラムを構築 ・大人がやりたい「楽しい」企画 ・上手な見せ方(啓発)と魅力ある内容 ・誰でも参加しやすい雰囲気を作り ・地域に在住している大人と、子どもの触れ合う機会をできるだけ多く作る ・大人にも子どもにも情報が届く方法。 ・SNS、ポスター貼付、回覧板等(学校 生徒へチラシ配布) ・活動の存在を知るきっかけとなる場を増やす。 ・地域協働学校の取組みを、リタイアした人をはじめ広く多くの市民に伝え、理解を得る。 ・親の参加を積極的によびかけることで、子どもたちを媒介に親どうしがつながる工夫 ・参加しやすい環境 ・親子で参加できる工夫を凝らす ・運営を主導的に担ってくれる方だけでなく、お手伝い程度の参加も募るなど、参加のハードルを下げる工夫 ・参加のハードルを下げるコーディネーター役 ・地域の間に入る人間などが、大人(大学生も含む)や小、中学生に企画を伝える。	・身近なことから自分ごととしてあたり前として考えていく力を育てる ・さまざまな可能性を秘めている「自分」を見つめ直せる場をつくり ・自分たちが住んでいる地域や日常生活にかかわるテーマを設定し、社会のありようそのものを考えることとつながっていることに気づく ・課題解決型だけでなく、価値創造型の企画 ・1人の子どもに対して、いろいろな大人が関わる ・周りのたくさんの方の大人に支えられていることに子どもが気付くこと ・大人も子どもたちに寄り添って、一緒に考える ・大人が全てお膳立てでなく、見守る事の大切 ・子どもの自由な発想を促す余白を残す ・気軽にチャレンジできる場や機会 ・興味、個性、得意なことの発掘 ・能力や経験を活かすことに気付いてもらう ・行動のためには「やりたい!」という動機が必要 ・大人が自分の近所をもっと知ることが大切 ・プロデューサーやコーディネーターが上手く継続的な出番を創っていく ・課題を我がことととらえられる事例をわかりやすく発信 ・学校でのESDの取組等で、全校の大人数ではやり切れなかった部分を、その後の活動として地域で行っていただけたら、学校と地域の繋がりができ、子どもたちも参加しやすくなるのではないかな。 ・自らの行動によって「何かが変わった」「効果があつた」という自己効力感を感じることの繰り返し ・子どもが様々な体験を通し、“できた!”の自己肯定感や達成感を感じる様にくり返し続けていく事によって、自分で考えたり、まわりとのコミュニケーションを大人が取るにより新しい発見、行動に続けていく